

2010

長く使えるサポート食器

Durable Dish

AD11 大江 茜
指導教員 谷上 欣也

1. 研究目的

子供の食事はどうしても散らかりがちである。食事の度に、服や机を汚してしまう様子が多く見受けられ、親の負担になっている。

そこで、食事をするために必要である食器に着目し、散らかりを軽減できる食器の研究を行う。

2. 調査と分析

子供の食事の様子と、子供用の食器について調査した。

まず、子供が自分で食べることでできる1～2歳児の食事の様子を調査した。調査で使用していたものは、ポリプロピレン製の子供用食器で、食べたものはご飯、汁物、おかずだった。観察したところ、食べ物をうまくすくいきれずにこぼしてしまったり、皿が軽いと動いてしまうことで、散らかってしまうということがわかった。

食器について調査したところ、一般に販売されている子供用食器の多くは、ポリプロピレン等のプラスチック素材でできているものや、キャラクター等のプリントがされているものだった。便利さや、子供らしさがある反面、子供の時しか使えない一時的なものになってしまっていることに問題を感じた。

3. コンセプトの立案

「食べるをサポートする、家族皆が使える」

子供が自分で食べることをサポートし、結果的に親への負担の軽減を図る。さらに調査でわかった、子供の時だけという概念を改める食器を提案する。

4. デザイン展開

子供が食事をするために、最低限必要である茶碗と平皿のデザインを行う。

はじめに子供が食べやすい形状を考えた。検証から、すくいきれないという問題は、皿のフチに返しをつけることで改善された。また、茶碗の内側のカーブを緩やかにする方が汁が勢いよく流れ出ないことや、高台を広く低くすると安定しやすいということがわかった。

デザインをする上で、長く使っていけるように新しい形を探すのではなく、普遍的でなじむ形に

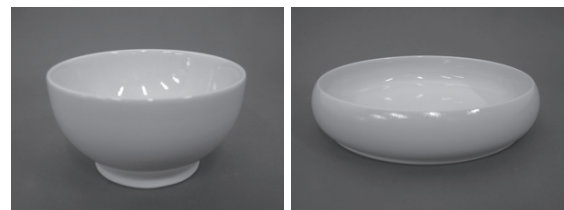
するべきだと考えた。また、用途を絞らず曖昧にすることで、子供のときはお茶碗として使っていたものを大きくなったら、小鉢として使用したり、家族間で共有できるようにすることで、長く使っていけるように考えた。大きさは従来の子供用の食器を参考にし、大人でも使い勝手のいい大きさになるよう配慮した。

素材は、従来のものに多いプラスチックから陶器にする。プラスチックの食器は傷がでやすく、そこから菌が繁殖してしまう恐れがあるため、長く使っていくには向かないと考えた。陶器にはプラスチックにはない温かみを感じることができる。また、陶器はプラスチックに比べ重みがあるので、安定しやすくなる。

5. 完成図

茶碗

平皿



6. 結論

見た目については、茶碗、平皿ともに大きさがちょうどいい、形がかわいい、大人が使っても違和感はない等、前向きな感想を頂くことができた。実際に子供に使用してもらったところ、平皿は安定感があり、フチもうまく使えていた。茶碗は持ち上げる際、内側に親指が入ってしまった。大人に使用してもらった場合、大きさについては問題なかったが、平皿の返しがあることで、しまう時にかさばりそうという意見があった。

目的の1つであった、散らかりの防止は概ね達成できた。しかし、長く使っていくために家族皆が使いやすくなったことで、すべてにおいて平均をとるようになってしまった。茶碗は子供にとっての食べやすさ、平皿は扱いやすさに問題を残してしまい、さらに検討する必要があると感じた。

7. 参考文献

ベビーレーベル コンビ株式会社

www.combi.co.jp/products/tableware